

令和5年2月17日  
sakumo 佐久市子ども未来館

## 令和4年度 全国科学館連携協議会 北信越ブロック会議 実施報告

### I. 日時

令和5年2月17日（金） 14:00～16:00

### II. 開催方法

オンライン会議（zoom 使用）

### III. 参加館

北信越ブロック加盟館 7館 12名、加盟館以外 1名、連携協事務局1名 計14名

### IV. 次第

- 幹事館から開会挨拶
- 連携協会長挨拶
- 講演『公民館から学ぶ地域の人達とつくる施設づくり』  
講師：熊井 晃史 氏
- 講演に関連する質疑応答や意見交換（熊井氏を交えて）
- 事前アンケートを基にした意見交換など
- 連携協事務局からのお知らせ
- 幹事館から閉会挨拶

### V. 講演会

#### 1) 熊井氏 講演『公民館から学ぶ地域の人達とつくる施設づくり』

講演は講師の熊井氏と、幹事館の佐久市子ども未来館館長 島崎との対談形式で行った。最初に、島崎から講演の主旨説明として、ICOMの新定義の中に「コミュニティの参加とともに博物館は活動し」という文言もあり、「コミュニティ」という視点は、これからの科学館・博物館にとっても大切なことだと感じており、地域の人達と共につくっていくことが重要だと思っているとの説明がなされた。

熊井氏からは、これからの科学館博物館のあり方や、学びのあり方について、主に以下の話がなされた。

・遊びや学びの地産地消：ワークショップ（参加体験型の学び）には、地域の風土に即した遊びや学びを生む可能性がある。その土地の学びというものが、科学館では顕在化して

いるというのは、ものすごく重要な可能性がある。そういった学びも、科学館の中で重視して行ってほしい。

- ・社会教育とは：「社会」を意味する「society」を、福沢諭吉は最初「人間交際（じんかんこうさい）」と訳した。人間関係の中で育まれることが、社会教育であると思っている。具体的な顔が浮かんでくる様な関係性の中で何かやっていけるというのが、社会教育なんじゃないかと思っている。

- ・非意図的な学びを日常に埋め込んでいく：これからの施設のあり方は、地域の人との日常の暮らしの中に、どのように学びを埋め込んでいけるか。埋め込み方のあり方が重要になってくる。

- ・無目的にいられる機会や時間、そこから生まれる人とのつながり：沖縄の公民館では、無目的にいれる時間を意図的につくってある。あんまり気負わずにすることができる。その結果、自然と人と人がつながっていく。

- ・科学館博物館とコミュニティ：科学館・博物館は、共通の興味関心を持っている人達とコミュニケーションが取れる回路があるという特徴がある。そこを活かしていくことが重要。

- ・科学館博物館が地域の「共視」先を設定：科学館博物館は特に、地域のみinnで共通で見ることができる「共視」先を設定できる。地域のみinnで「〇〇を守ろうよ」「△△を育もうよ」みたいなことを設定していくことは重要。

## 2) 講演内容に関する質疑や感想発表

現状の取り組みや課題、講演の感想なども含め、各館が順番に発言をしてもらった。各館からは、今回の会議のテーマである「地域連携」についてなどの事例や、抱えている課題等に関する発言があった。

いくつかの発言を以下に記す。※発言施設名は省略。

- ・地域連携は、館の手を離れて、自走していくことが一番だと思っている。そのためきっかけとして、館の活動がある、という認識が良いと思う。自走させるということを常に考えることが必要。活動だけでなく、後のことも考えることが重要だと思っている。

- ・ボランティアの人数の減少と高齢化が課題。館のスタッフの人数も多くないので、ボランティアの人達に負担がかかっている。もう少し余裕を持ってボランティア活動ができれば

ば、もっと良い関係性ができると思う。

・外部連携事業として、県の研究機関に協力してもらっている。地域の气象台などは、地域の人達にとって身近な存在なのかと思っていたが、身近であっても、実際に何をしているのかを知らなく「参加して知ることができた」という声があった。

・「松本平でカノープスを見える場所をみんなで見つけよう！」という取り組みを行った際、写真を持ってきてくれる人が沢山いた。そういうところからコミュニティーができるのだと感じた。

・所蔵の展示物を「移動ミニ博物館」として、学校や地域へ貸し出しをしている。ただ貸出するだけでなく、もっと活用をして、広いところで、例えば図書館などで展示するなど良いのでは、と以前、学芸員同士で話したことを、今回の講演を聞いて、思い出した。

・参加者、保護者、そして自分自身も楽しむ事が大切。

・同じような環境の他施設から学ぶことができる。他館と協力して展示をつくるなど、自分の館だけにかかえる時代ではないので、連携協事務局では、皆さんの希望を聞いて、反映していけたらと思う。

## VI. 事前アンケートを基にした意見交換など

### ① 事前アンケートを基にした意見交換（感染対策について）

加盟館を対象に、事前にアンケートを行った際、感染対策についての質問が数件あったため、意見交換の時間をとった。3月13日からマスク着用は個人の判断に委ねるという政府の発表もあり、以下の質問を議題とした。

- ・入館者の連絡先の把握は、いつまで？
- ・VRゴーグルの展示物を使用制限しているが、いつ使用可能にするのか？
- ・イベントの参加定員を人数制限していたが、今後どうするか？

上記の点について、2館から以下の発言があった。

#### <サイエンスヒルズこまつ>

体験教室については、コロナ禍前の定員の半分の定員にしていたが、基本的にはもとに戻す方針。現場の意見として、少ない人数であった時の「手厚い対応」というメリットもあることから、完全にもとの人数に戻すのではなく、ちょっと減らした形で、実施回数

を増やして運営しようか、という話が出ている。

<松本市教育文化センター>

既にもとに戻している。来館者の情報の記入は取りやめ。検温の為の体温計は置いてはいるが、義務ではない。人数制限ももとに戻した。「マスクをしてください」という表示も撤去した。

<幹事館>

今後、政府等の発表や社会情勢等で変化していくことだと思うので、引き続き、加盟館同士、情報交換をしていきたい。

## ②その他

上田創造館から、人材が集まらない事や予算のことなどで、参加者に向けて、以下の様な質問がなされ、以下の様なやり取りがあった。

<上田創造館>

現状、募集をしても人が集まらないことが課題。賃金が低いことも原因。指定管理者制で運営しているが、人件費、消耗品費が毎年どんどんと削られている。この仕事に、希望を持ってもらい、働きたいという人が集まってもらうように変革できればと思っている。どうしたら良いか、皆さんに教えてもらいたい。

<講師 熊井氏>

「嬉しい」「楽しい」気持ちは、人に感染していくので、科学館・博物館のスタッフの人達が、地域の人達に、そのような気持ちを感染させていくことも必要。

<幹事館>

全国のミュージアムの課題でもあるので、引き続き、加盟館同士、意見交換、情報交換をしていきたい。

## VII.連携協事務局から

ブロックでの活動は会議だけでなく、例えば「人材交流がしたい」「研修会がしたい」など、そのブロックならではの活動をしてもらって良い。その様な活動にも助成していきたい。また、展示物の巡回についても、複数館で共同で申請ができないかとの問い合わせもある。そして、地域ならではの展示をつくる方法もある。

ブロックでの活動について、フレキシブルに連携協が対応できるようにしたいと思っているので、今後、加盟館の人達から意見等いただければ、との投げかけがあった。

以上